

二人の軽業師

小川未明

青空文庫

西にしと東ひがしに、上手じょうずな軽業師かるわざしがありました。綱つなから、綱つなに飛び
 うつり、高いたかはしうえの上うへでもんどりを打ち、見ていて、ひやひや
 することをておも手落ちなく、やって見みせましたから、その評判ひょうばん
 というものは、たいへんなものでありました。西にしの方ほうの人は、西にし
 の都みやこで、興行こうぎようをする甲こうの男おとこをほめました。東ひがしの方ほうの人は、東ひがし
 の都みやこで、興行こうぎようをする乙おつをほめました。

「さあ、どちらがうまいだろうな。」

両方りょうほうの軽業師かるわざしのするのを見みたものは、頭あたまをかしげました。
 それほど、この二人ふたりの芸げいは、人間にんげんばなれがいているといいつてよ
 かったのです。最初さいしよから、こんなあぶない芸げい当とうというものは

できるものでありません。それには、血の出るようなけいこを積んだからです。

いつしか、西の都で、人気を呼んでいる甲の耳に、東の都で、やはり、たいへんな人気を呼んでいる乙の評判がはいりました。

「そんなに、乙は、うまいかな。ひとつ、こつそり見物に出かけてみよう。」と、甲は、思いました。

だれにも気づかれないうちに、甲は、東の都へ、乙の芸当を見にやってきました。そして、ふつうの見物人にまじって、ながめていました。高い、高い、空中から、ぶらさがっている止まり木の手を放して、あちらに下がっている止まり木につかま

る、あぶない芸当は、ほんとうに、見ているものをひやひやさ
せました。

「なるほど、これはうまいものだ。ふつうの芸人ではできない
ことだ。なにか、深い研究をつまなければ、こんな人間ば
なれのした芸はされるものでない。」甲は、つくづく感心して、
西の都にもどりました。

その後、乙の評判をするものがあると、甲は、いつしよに
なつて、乙をほめました。

「あの芸は、とうてい私にはできません。乙こそ名人です。」
といつて、謙遜したのです。

ちやうど、それと同じように、東の都で、評判を取つてい

おつ 乙の耳にも、西の都の、甲のうわさがはいりました。

「そんなに、甲は、偉い軽業師かしらん。ひとつ、こつそりといつてみよう。」と思ひました。そして、甲がしたように、乙も、そのことをだれにも告げずに、西の都へ出かけてゆきました。

これは、まったく、飛びはなれた業であります。高い、高い、空 中から、飛び降りて、はるか下に張られた一本の太い綱をつかむのであります。まったく、命を投げ出してするのでなければ、いくら熟練をしても、思ひきつて、できることではないのであります。

「なるほど、たいしたものだ。これは、人間のしわざでない。」と、深く感歎して、乙は、東の都へもどりました。

ふたり 二人の軽業師は、たがいに相手の芸をほめたのであります。

そして、二人は、いずれも一度、あつて近づきとなり、芸について話し合つてみたいと思つていました。

ふたり おも 二人の思いが達せられるときがきました。甲と乙とは、あるところであつたのであります。

「あなたこそ、まつたく、人間の力ではできないような、芸当をなさいます。私は、感心しています。」と、甲がいました。

「いや、私は、まだ未熟でございます。あなたの足もとへもまいません。」と、乙は、謙遜して、答えました。

「そんなことはありません。あの揺れている止まり木をどうして、

ほかのものがつかめるのですか！」と、甲はほめました。

乙は、驚いて、

「そんなら、あなたは、私の未熟な芸をどこかでごらんくださいましたか……。」と、たずねました。

甲は、笑つて、

「拝見しないどころではありません。西の都にも、あなたの評判はたいしたものですから、じつは、人に気づかれないうようにして、東の都へまいり、みんなにまじつて見物しました。そして、感心して帰つたのです。」と、すべてを打ち明けて話したのであります。

乙とて、やはり同じでありました。

「甲さん、私も、じつは、西の都へまいって、あなたの芸を見てすっかり驚いてしまいました。そして、世間がもてはやすのもあたりまえだと、自分の未熟を恥ずかしく思つたのでした。」と
いいました。

芸に熱心な二人は、はからずも同じ気持ちでありましたので
す。二人は、覚えす顔を合わしました。

「それで、あなたは、あの高いところから、飛び降りなるときに、なにか、口のうちでおっしゃるようですが、あれは、おまじないでございませうか？」と、乙がたずねました。

「いえ、そんな迷信的なものではありません。それには、子細があります。私も、打ち明けますから、あなたも、あの揺れる止

まり木をつかまえなざる秘術を教えてくださいませんか？」と、

甲はいいました。

「では、お話いたしましたしょう……。」と、乙はうなずいて、つぎのようなことを話しました。

「私は、子供の時分から木に上ることは上手でした。どんなに高いところへ上つても、怖ろしいことを知りません。ある日、一羽の美しい鳥が村へ飛んできて、木立にとまって鳴きました。村では、珍しい鳥だといって騒ぎをして、どうかして、捕まえないものだといって、その後を追いまわしたのです。鳥は、池の淵にあつた、高いけやきの木の枝さきにとまってさえずっていました。ここなら、だれも上れないだろうと、小鳥は安心していい声で

鳴ないていました。人々ひとびとは、ぼんやり見み上げて、どうすることも
できません。私わたしは、すぐに上のぼってゆきました。なるだけ、鳥とりの気き
づかぬように、静しずかにして、ようやく、手てのどきそうなところ
まできて、ちゆうちよしました。手てを出だしたら、鳥とりが逃にげると思おも
ったからです。近ちかづいて見みれば、見みるほど、美うつくしい鳥とりでした。ど
うしたら、捕つかまえられるかと考かんえていましたが、一ひと思おもいに、捕つか
まえるよりしかたがないと、ねらいを定さだめた刹せつ那な、鳥とりは、飛とび立た
ったのです。私わたしの体からだも、いっしょに、木きから飛とび上あがると、鳥とりを
つかまえました。私わたしは、もんどり打うって落おちました。もし、そ
れが、地じ面めんだったたら、微み塵じんに碎くだけてしまつたでしょう。水みずの中なかへ
落おちたばかりに助たすかりました。しかし、握にぎっていた鳥とりは、死しんで

しまいました。それから、わたし私は、急に村の人々からほめそやさ
 れました。両りょうしん親のない自分じぶんは、ついに、こんな渡世とせいにまで身
 を落おとしましたが、いつも、鳥とりを捕つかまえたときの呼こきゆう吸ゆうひとつで、
 どんないあぶ危あぶない芸げい当とうも、やってのけるのであります。「
おつおつはなし
 乙おつの話はなしをきいていた甲こうは、うなずいて、感かん心しんしました。
 「なるほど、その呼こきゆう吸ゆうです。よく、わかりました。」といつて、
 頭あたまを下さげました。

つぎに、甲こうは、どうして、高たかい空くうちゆう中ちゆうから、飛とび降おりて、一
 本ほんの綱つなを大だい胆たんにつかむかを話はなしたのです。

「私わたしが、口くちの中なかで、となえますのは、子こ守もりの名なです。不ふ幸こうなおつ
 たという孤みなし児ごであつた子こ守もりの名なです。私わたしが、六むつばかりのとき、

河かわの中なかに落おちました。おつたは、九つだつたといひます。泳およぎも
 知しらぬのに、飛とび込こんで私わたしを救すくおうとしました。私わたしは、人ひとに助たすけ
 られましたが、おつたは、ついに助たすかりませんでした。その後ご、
 私わたしの一家かも貧びんぼう乏ぼうをして、私わたしは、興こうぎ行ぎ師しに売うられましたが、自じ
 分ぶんの身みの不幸ふこうを思おもうにつけて、おつたがかわいそうになります。
 どうせ、いつ死しんでも惜おしくない身みと思おもつて、おつたの名なを呼よび
 ながら、私わたしは、一ほん本の綱つなに飛とびつきます。不ふ思し議ぎに、いまだ、そ
 れをつかみそこねたことはありません。死しんだ、おつたの霊れいが守まも
 っていてくれるのでしよう……。―

これが、甲こうの話はなしでありました。

「よくわかりました。精せい神しんの力ちからです。芸げいが、命いのちがけだからです

。「と、乙は、感嘆しました。

その後のことでもあります。

「甲には、いくらうまくても、ぶらんこの止まり木につかまることはできない。また、乙には空中から飛び降りて、一本の綱につかまる、芸当はできない。」と、いう意味のことが、西、東で、人々のうわさとなりました。

「人間には、だれにも、できることと、できないこととがあるものだ。」と、道理のわかった人はいいましたが、わからないものは、

「甲と乙と、どちらが偉いかな！」などと、やはり比較をしたのであります。

もし、二人が、めいめいに、自分の独得の芸を守っていたら、なんのこともなかつたでしょう。

乙は、どうかして、甲の秘術が学べぬものかと思ひました。

そして、いつも、揺れる止まり木をつかむときに、彼は、美しいことりすがたおも小鳥の姿を思い浮かべたのを、ある日、甲から聞いた、不幸の少女の姿を目に描いたばかりに、止まり木をつかみそこねました。彼は、真つ逆さまに、地面へ落ちて死んでしまいました。

不思議なことには、甲が、高いところから、飛び降りるときに、いつも、おつたの名を呼んで、ちようど、水中へ飛び込む気で、綱をつかむのを、ある日、その名を呼ぶことを忘れて、美しい鳥をつかまえる調子で、綱を目がけて飛び下りました。する

と、指さきは、綱にかかったが、綱は、あちらへそれて、甲は、堅い壁で頭を打って死んでしまいました。

東西二人の、名人の軽業師が、そろいもそろつて、芸を仕損じて死んだといううわさが、また一時、世間を騒がしました。が、だれも、この二人の軽業師が、熟練しきつている芸当を、どうして仕損じたかという原因については知りませんでした。

そのうちに、このうわさも消えてしまえば、かつて、二人の名人の軽業師が、東、西にあつて、一人は、西の都をにぎわし、一人は、東の都をにぎわしたということすら、いつしか、忘れられてしまったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集 5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

※表題は底本では、「二人《ふたり》の軽業師《かるわざし》」
となっております。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2019年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二人の軽業師

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>